

## 【書評】

### **Nathaniel Wolloch, *Nature in the History of Economic Thought: How Natural Resources Became an Economic Concept***

London and New York: Routledge, 2016, xii + 272 pp.

社会の経済的・文化的進歩と自然の物理的・環境的条件との関係は、歴史的に、どのようなかたちで科学的な知と実践の対象とされてきたのか。こうした問いは、一向にその解決を見ない地球規模での環境危機を前に、歴史・思想史研究においても重要性を増しており、関連する文献も着実に増えつつある。本書は、経済思想史の立場からこの問いに正面から取り組むものであり、科学史や環境史の知見を交えつつ、自然の経済的観念——すなわち「人間のために利用される資源」としての自然観——の歴史的な成り立ちとその発展を論じた知性史 (intellectual history) 研究である。著者ナサニエル・ウォロック (テルアビブ大学・イスラエル) は啓蒙期を専門とする研究者であり、本書は2011年に刊行された前著 *History and Nature in the Enlightenment* の続編という位置づけを有する。本書の叙述は、古典古代のオイコノミア論から中世、ルネサンス期を経て重商主義の言説、他方で19世紀末以降の社会主義思想やジェヴォンズ、マーシャル、ケインズ、さらに現代の環境/エコロジー経済学にまできわめて広い射程をもつが、分析の重心はスミス、リカードウ、マルサス、セー、J.S. ミルといった古典派経済学、およびその思想的土台を形成した啓蒙思想 (ケネー、コンドルセ、ヒューム、ヴェッリなど) に置かれている。

本書の大きな特徴は、経済思想史における自然の経済的観念を一貫して「連続的」、「直線的」に発展したものとして読み解いていく点にある。ポリティカル・エコノミーの歴史

において、資源の問題は無視されたのではまったくなく、むしろ広く人類の進歩や社会的・文化的洗練のために、相互作用する種々の自然物をいかにして秩序だて、その有用性を効率よく引き出すことが可能か、そのための経済全体の統治はいかになされるべきか、という関心がつねに議論の中核に存在し続けていたと著者は強調する。

著者によれば、自然を人間の利用のための資源とみる見方は、アリストテレスやクセノフオンのオイコノミア論にすでに存在しており、やがて古典古代のコスモロジーが中世から初期近代にかけて聖書のそれと密接に結びつくなかで、「存在の大いなる連鎖」における人間の特別な地位は強化され続けた。16世紀以後の重商主義時代には科学革命の影響 (機械論や数量化) のもとで、宗教的要素は表向き弱まりつつも、とりわけハートリブ・サークルのメンバーであったW. ペティ、あるいはロックに顕著に現れるように、新たな科学的装い (ベイコン主義) をまとって、有用性の対象としての合理的理解とネイションの利害に絡んだ資源管理の実践とが結びけられていった (第I部)。17世紀後半以降の啓蒙の時代に入ると、四段階理論 (狩猟—遊牧—農耕—商業) が象徴するように「未開」と「文明」を歴史的進歩の段階的差異として捉える視座が新たに設定され、勤勉な労働力の増大と土地の耕作・改良を軸とした物質的進歩が、社会的進歩と文化的洗練を支える不可欠な土台とみなされた (第II部)。こうした啓蒙思想の歴史的進歩の理論的把握のうえに

成立した古典派経済学は、「自然資源の利用から生まれる富の生産の効率性を最大化し、社会的に公正な仕方でのこれらの富を分配するための適切な経済政策」(197)を探求する科学へと発展するにいたった。もっともミルの停止状態論に認められるように、19世紀中葉には、産業化のもとで進行する未開拓の自然の消滅に対するロマン主義的な反発が存在したが、しかしそれも人類の進歩のために払うに値する、不可避の犠牲と理解された——そもそも自然の美的享受それじたいが、それに先立つ自然力の物理的支配の賜物なのである(第III部)。

こうした経済思想史における自然認識の連続的・直線的な理解は、むしろその変容や断絶を重視する先行研究とは大きく隔たる点である。たとえば本書でしばしば言及される科学史家M. シェイバスの*The Natural Origins of Economics*が、ミルの経済学に、「経済」認識の決定的な転換——すなわち、エコノミーを自然の物理的秩序から独立した、個々人の主観性が織りなす人為的領域と見る「経済秩序の脱自然化」——の端緒を見いだすのとは対照的である。

本書で描かれる自然の経済的観念は、いうまでもなく人間中心主義的な見方であり、現代の「環境主義」のそれとは相容れない。ただし著者は、これを理由に経済学の歴史を丸ごと断罪する議論にたいしては、「思慮を欠いた」「無益」なものであるとしてきわめて批判的である。むしろ著者は、自然の有用性を最大限引き出すことが社会の道徳的・文化的進歩の前提をなすという啓蒙以来の知見を再評価する立場から、広く経済学の知的遺産のなかに、自然の有用化の精緻な理論と洗練された方法を探っていくことが今日の危機と

その打開の方向性を見定めるより有効なやり方であると主張する。なるほど、本書によって、自然的富、気候、人口管理、賃金、食糧生産と飢餓、そして農業と商工業の相互依存関係をめぐる多様な思考と言説のなかに、種々の物的資源に内在する自然力の合理的(あるいは非合理的)利用とそれを可能にする土地所有や税制を含む統治のあり方に関わるゆたかな議論の蓄積をさまざまに見いだすことができる。そこには、たとえば成長か反成長か、といったいくぶん硬直した議論ではすくい取れない複雑な知見が含まれていることは確かであろう。

しかしながら、本論における細やかな分析や叙述に比して、進歩に資する自然支配の単線的な発展という本書が提示する図式はあまりに平板だという印象も拭えない。じっさい、本書で描かれる自然の有用性をめぐる議論は、けっして小さくない複雑な差異や変化に富んでおり、それらの意味を深く掘り下げるならば、はたしてそう単純に連続的なナラティブとして叙述できるのか疑問が生じる。この点は著者が批判の標とする現代の「環境主義」をかなり一面的に論じたことの帰結であり、かえって著者の本来の狙いを損なうものであるように思われる。また啓蒙を再評価する視点から抜け落ちるのは、ヨーロッパの産業的優位と繁栄を可能にした植民地支配と結びついた被支配地域での暴力的な資源掠奪や環境破壊の歴史への批判的視点である。この数十年の環境(思想)史やポリティカル・エコロジーにおいて1つの中心的な争点となってきたのもまさにそこではなかったのか。

(桑田 学：福山市立大学)